

学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係<sup>1</sup>  
教養選択科目「社会心理学」の場合

牧野幸志

**The relation of student ratings of teaching to student self-ratings,  
examination scores, and satisfaction with the class.**

**In the case of elective subject “ Social psychology ”**

**Koshi Makino**

Abstract

The relation of student ratings of teaching to student self-ratings of learning, examination scores, and overall class satisfactions are analyzed. One hundred and eight undergraduate students responded to the questionnaire. The main results were as follows : (1) Three factors were evaluated from the student ratings of teaching. There are “ evaluation of class contests ”, “ evaluation of teacher’s attitudes ”, and “ evaluation of class style ”. (2) Three factors were evaluated from the student self-ratings. There are “ active attitude in the class ”, “ active attitude out of the class ”, and “ general attitude in the classroom ”. (3) “ Active attitude in the class ” is positively correlated to the “ evaluation of class contests ” and “ evaluation of teacher’s attitudes ”. (4) Students who rated teaching as high were more satisfied with the class than those who rated teaching as low. (5) Students who considered self-ratings as high were more satisfied with the class than those who considered themselves as low. Moreover, students who had a more active attitude in the class got higher examination scores than those who had a less active attitude. (6) The consideration placed on teacher’s personality is not related to the examination scores, but positively correlated to student satisfaction with the class. These findings suggest that students who have an active attitude rate the class high, are satisfied with the class, and get high examination scores. Finally, teachers might have to think out some way to make students more active in the class.

Key words : student ratings of teaching 学生による授業評価, student self-ratings 自己評価, examination scores 成績, satisfaction with the class 授業への満足度, elective subject 選択科目.

問 題

近年, 日本の大学においても授業評価が頻繁に行われるようになっている(井上, 1993)。

<sup>1</sup> 本研究は, 平成12年度高松大学教育研究経費配分による共通研究費の援助のもとに行われたものである。

学生による授業評価が比較的古くから行われてきたアメリカ合衆国では、その授業評価が担当教官の勤務評定に使われている（Greenwood & Ramagli, 1980）。しかしながら、日本の大学においては学生による授業評価については反対の意見が多く、従来、授業の改善や担当教官の自己点検のために行われることが多かった。学生による授業評価の導入に難色を示される理由として、「出席の少ない学生や受講態度の悪い学生に酷評されなければならないのか」、「厳しい指導や厳しい成績評価を行えば、学生の授業評価は下がるので、教官は学生に迎合するようになる」、「学生の評価能力は疑わしい」、「学生はまず自分の学習態度について自己評価をするべきである」などがあげられる（広島大学教育学部，1997；大槻，1993など）。アメリカと日本における授業評価の現状の違いは、両国の大学の位置づけの違いにもその原因がある。アメリカにおける大学は高等教育の場であり、学生自身に学習への動機づけが高く、それゆえに授業に望むことも大きい。また、アメリカでは、学生が自分で授業料を支払うのが一般的であり、このことも学習への動機づけ、授業への期待をも高めると考えられる。他方、日本においては、小学校から高等学校までの教育に重点が置かれており、受験勉強から開放され入学する大学はレジャーランド化しつつあり、学生の学習への動機づけ、授業への期待も低い。日本においては、学生の保護者が授業料を支払うのが普通であり、学生自身に高い授業料を払って授業を受けているという認識は薄いといえよう。

1970年代以降、アメリカを中心として授業評価に関して、多くの研究が行われてきた。その多くは、授業評価の妥当性、信頼性を検討する基礎研究が主なものであった（Elmore & Pohlmann, 1978；Feldman, 1989）。これらの基礎研究に続き、学生の授業評価に影響を及ぼすと考えられる教官、学生、クラス、教材などのさまざまな要因の探索とその効果が調べられてきた。授業評価と学生の個人特性との関連では、授業評価と成績との関連が多く検討されている。Feldman（1989）によると、学生による授業評価と成績との間には高い正の相関がみられている。一方、日本における授業評価に関する研究の多くは実践報告のレベルにとどまっていた。これは、授業評価実施の目的が授業改善、あるいは自己点検のためであったからであろう。しかしながら、最近になり、授業評価と自己評価、成績などとの関連をみた研究がみられる。安岡・高野・成嶋・光澤（1986）、安岡・吉川・高野・峯崎・成嶋・光澤・道下・香取（1989a, b）は、学生の授業評価と成績との関連は低いことを報告している。また、自己評価と学生による授業評価との間には、やや弱い正の相関がみられている（安岡他，1986）。松田・三宅・谷村・小嶋（1999）は、学生による

授業評価と自己評価、授業選択態度、及び成績との関連を検討している。それによると、自己評価は学生による授業評価と高い正の相関を示した。また、明らかに成績の悪い学生は授業評価が低い、女性の方が男性よりも授業評価が高い、という結果が報告されている。

本研究は、日本の大学において、学生による授業評価を導入し、実施する際に必要となる基礎的なデータを得ることが目的である。方法は、松田他（1999）を参考とした。まず、学生による授業評価及び学生による自己評価を行う際に必要となる客観性の高い授業評価項目リスト、自己評価項目リストの作成を行うことが第1の目的である。次に、先に述べたように学生による授業を行う際には、評価を行う学生の自己評価が問題となる。したがって、本研究では、学生の自己評価に関する要因とその影響を明らかにすることを第2の目的とする。さらに、学生による授業評価と自己評価、成績、満足感との関連を多角的に検討することが第3の目的である。これらの目的を達成するために、以下に松田他（1999）での問題点とその改善策を示す。

第1に、従来の授業評価と成績との関連性をみた先行研究（松田他，1999；三宅，1999など）において、成績評価は優、良、可、不可（あるいはA、B、C、D）の4段階でなされている。しかしながら、実際には学生の試験結果は点数でなされていることが多い。特に、選択式、簡単な記述式の場合には、明確な基準を置き、点数化する必要があるだろう。4段階での評価ではその得点間隔が大きく、詳細な分析が行うことができない可能性がある。したがって、本研究では4段階評定ではなく、試験結果の得点を成績の指標とすることとした。

第2に、松田他（1999）、三宅（1999）においては教官の評価が学習達成感に深く関わっていることが示されている。しかしながら、2つの研究では、複数の授業を対象としたため、学生が実際に接した担当教官は講義によって異なっていた。つまり、被調査者は各講義の教官を評定していた。したがって、担当教官に関する評価を一括して分析することに問題があった。そこで、本研究では被調査者が少なくなるというデメリットはあるが、1つの授業（担当教官）を対象とし、さらに、授業評価とは別に学生による担当教官の評価を加えることとした。

第3に、従来の授業評価に関する先行研究では、授業評価、あるいは自己評価と成績との関連が検討されてきた。しかしながら、授業評価の一側面として、受講生である学生がどの程度その授業に満足しているかが重要である。つまり、学生が授業を評価する、授業態度を自己評価すると同時に、受講後の授業への満足感を測定する必要があると考えられ

る。なぜなら、授業評価と満足感との間には非常に強い関連があると思われ、さらには得られた満足感が将来の学習意欲に促進的効果をもたらすと予想されるからである。松田他（1999）、三宅（1999）の研究では授業評価の項目とは別に総合評価の項目を設けているが、この項目も学生が授業を総合的に評価する項目であり、受講後の授業への満足感を測定する項目ではない。したがって、本研究では、自己評価、成績に加えて、学生自身の授業への満足度を測定することにより授業評価をより詳細に検討していく。

## 方 法

### 対象授業と被調査者

平成12年度学部共通教養科目「社会心理学」（学部1年生前期）の1クラスを対象とし、その受講生を被調査者とした。この授業は選択科目であり、学生はいくつかの選択科目の中からこの授業を選ぶことができる。「社会心理学」の授業は、毎回、前半はテキストを用いて講義が行われ、後半は担当教官が作成した「社会心理学コラム」が話された。対象授業の授業日は毎週木曜日2校時（10：30～12：00）であった。登録者数は180名であったが、クラスサイズは、毎回100～120名程度であった。担当教官は、授業開始時点では教職歴なし（新採用）の男性であった。出席はカードリーダーにより管理されており、教官が点呼してとることはしなかった。なお、対象となる授業が必修科目である場合との比較については同時期に行われた牧野（2000）を参考にさせていただきたい。

被調査者は香川県内の私立T大学の学生108名（男性94名、女性13名、不明1名、平均年齢19.42歳、年齢幅18～22歳）であった。

### 質問紙の構成と成績

学生による授業評価 松田他（1999）、三宅（1999）などを参考にして、15項目の学生による授業評価を測定する項目（詳しくは後述）を作成した。学生による授業評価に対する15項目に対して、「まったくそう思わない」～「非常にそう思う」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど対象授業に対する評価が高いことを示す。

学生による自己評価 松田他（1999）、三宅（1999）などを参考にして、15項目の学生による自己評価を測定する項目（詳しくは後述）を作成した。学生による自己評価に対する15項目に対して、「まったくそう思わない」～「非常にそう思う」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど対象授業における自己評価が高いことを示す。

学生による担当教官特性評価 松田他(1999)、三宅(1999)などを参考にして、4項目の担当教官の評価を測定する項目(熱意がある、ユーモアが感じられる、友好的である、信頼できる)を作成した。学生による担当教官評価に対する4項目に対して、「まったくそう思わない」～「非常にそう思う」の5段階で評定を求めた(得点が高いほど担当教官の特性評価が高いことを示す)。

学生による授業の満足度と出席回数 被調査者がどれくらい対象授業に満足していたかを測定するため、満足感を測定する項目(「1.全く満足できない、よくない授業であった」～「5.非常に満足できるよい授業であった」の1項目5段階評定)に対して、評定を求めた。得点が高いほど対象授業に対して満足していることを示す。また、被対象者の出席回数は、カードリーダーの出席回数を使用した。

成績 学生の成績は、講義の最終回に行われた試験の結果を利用した。試験は記述式筆記試験であり、50点満点であった。平均点は27.05点、標準偏差は11.21であった。

#### 手続き

平成12年度前期の「社会心理学」の授業を対象に調査を行った。調査は、「授業に関するアンケート」という形式で実施した。調査は、平成12年7月13日のテスト当日、テスト実施前15分を用いて行った。調査の実施者は大学の教務課とし、被調査者による担当教官の評価に影響が出ないように配慮した。

#### 結果

本研究は、日本の大学において、学生による授業評価を導入し、実施する際に必要となる基礎的なデータを得ることが目的であった。分析は、以下の手順で行われた。まず、授業評価、自己評価に関する項目に対する分析を行い、リストの項目を選択する。次に、授業評価と自己評価、自己評価と成績、満足度との関連を相関分析により明らかにする。これと同時に、授業評価、自己評価の高低により成績かつ/あるいは満足度が異なるかをt検定により検討する。なお、本研究では被調査者の男女において極端に男性が多かったため、性別による分析は行わなかった。

#### 因子分析

学生による授業評価 学生による授業評価に関する15項目の評定値に対して因子分析を

Table 1 授業評価に関する項目の因子分析の結果（バリマックス回転後）

項目	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
授業の内容評価				
4. 授業の内容は興味を持てるものであった。	.762	.143	-.020	.602
5. この授業は自分にとって刺激となった。	.758	.203	-.057	.619
10. この授業は学習の目的がはっきりしていた。	.664	.288	.283	.603
2. この授業の説明はわかりやすかった。	.638	.314	.358	.634
1. この授業の内容は、全体としてまとまりのあるものであった。	.633	.366	.178	.567
3. この授業は、1時間に学習する量は適切だった。	.443	-.115	.327	.317
15. この授業はおおむね講義概要に沿ってなされていた。	.423	.201	.139	.239
教官の授業態度評価				
12. 教員は学生の意見や質問に十分に答えていた。	.350	.802	.052	.768
9. この授業は熱意をもってなされていた。	.094	.766	.377	.738
8. この授業は十分な準備がされていた。	.169	.746	.426	.767
11. この授業のテキストや配付資料は効果的であった。	.343	.739	-.050	.667
授業の形態評価				
13. 休講が多かった。*	.131	.073	.767	.610
7. この授業は聞き取りやすかった。	.310	.182	.588	.475
14. 授業の始まりが遅れたり、授業が早く終わったりすることが多かった。*	-.047	.112	.544	.310
6. 黒板や視聴覚教材(OHP, スライド, ビデオ, OHC など)を効果的に使っていた。	.380	.295	.465	.448

\* 逆転項目

行った (Table 1)。固有値 1 を基準とする因子分析 (主成分法, バリマックス回転) を行った結果, 第 1 因子は “ 授業の内容は興味を持てるものであった。”, “ この授業は自分にとって刺激となった。”, “ この授業の内容は, 全体としてまとまりのあるものであった。” など授業の内容に関する項目に負荷が高かった。したがって, これらを「授業の内容評価」因子とした。そして, 「授業の内容評価」を示す 7 項目 (  $\lambda = .79$  ) の平均を「授業の内容評価」得点として算出した ( 1 ~ 5 点, 得点が高いほど, 授業内容に対する評価が高い)。第 2 因子は “ 教員は学生の意見や質問に十分に答えていた。”, “ この授業は熱意をもってなされていた。”, など 4 項目に負荷が高かった。これらは, 授業を行う担当教官の態度を評価していると捉えられたので「教官の授業態度評価」因子と命名した。これら 4 項目 (  $\lambda = .75$  ) の平均を「教官の授業態度評価」得点として算出した ( 1 ~ 5

Table 2 自己評価に関する項目の因子分析の結果（バリマックス回転後）

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
講義内積極的態度				
7. この授業に意欲的に取り組んだ。	.794	.189	.072	.671
6. この授業を聞くことは楽しかった。	.714	.136	-.090	.536
5. 授業の内容をよく理解できた。	.695	.098	.196	.531
8. 授業で自分が何を学ぼうとしているかを意識して授業に臨んだ。	.641	.371	.075	.555
10. 授業の内容とこれまでの体験を結びつけて理解した。	.640	.074	.132	.432
講義外積極的態度				
15. 事前にこの授業の講義概要をしっかりと読んだ。	-.047	.799	.043	.642
13. わからないことは、わかるまでよく調べたり、尋ねたりした。	.360	.724	.085	.661
14. 授業に関連のある本や資料を調べた。	.162	.719	-.208	.586
12. 試験の前にしっかりと勉強をして、試験を受けた。	.327	.602	.162	.496
11. 試験勉強やレポート作成は、直前にやるのではなく計画的に行った。	.476	.527	.147	.526
受講態度				
4. 授業中、居眠りをしなかった。	.104	-.094	.826	.702
3. 授業中、私語をしなかった。	.234	-.221	.704	.600
2. 授業に遅刻をしなかった。	-.185	.161	.642	.472
9. 積極的にノートを取った。	.170	.277	.386	.254
1. 授業にはまじめに出席した。	.332	.181	.385	.291

点、得点が高いほど、教官の授業態度に対する評価が高い)。第3因子は“休講が多かった。”(逆転項目)、“黒板や視聴覚教材(OHP, スライド, ビデオ, OHCなど)を効果的に使っていた。”、“この授業は聞き取りやすかった。”など授業の形式あるいは形態に関する項目に負荷が高かったため、「授業の形態評価」因子とした。これら「授業の形態評価」に関する4項目( $\lambda = .57$ )の平均値を「授業の形態評価」得点として算出した(1~5点、得点が高いほど、授業の形態に対する評価が高い)。

学生による自己評価 学生による自己評価に関する15項目の評定値に対して因子分析を行った(Table 2)。固有値1を基準とする因子分析(主成分法, バリマックス回転)を行った結果, 第1因子は“この授業に意欲的に取り組んだ。”、“授業で自分が何を学ぼうとしているかを意識して授業に臨んだ。”など講義中の授業への積極的な学習態度に関する項目に負荷が高かった。したがって, これらを「講義内積極的態度」因子とした。そ

して、「講義内積極的態度」を示す5項目( =.80)の平均を「講義内積極的態度」得点として算出した(1~5点,得点が高いほど,講義中の学習に対する積極的態度の自己評価が高い)。第2因子は“事前にこの授業の講義概要をしっかりと読んだ。”、“わからないことは,わかるまでよく調べたり,尋ねたりした。”など5項目に負荷が高かった。これらは,講義以外での学習に対する積極的な態度を評価していると捉えられたので「講義外積極的態度」因子と命名した。これら5項目( =.80)の平均を「講義外積極的態度」得点として算出した(1~5点,得点が高いほど,講義以外での学習に対する積極的態度の自己評価が高い)。第3因子は“授業中,居眠りをしなかった。”、“授業中,私語をしなかった。”、“授業に遅刻をしなかった。”など授業の基本的な受講態度に関する項目に負荷が高かったため,「受講態度」因子とした。これら「受講態度」に関する5項目

Table 3 「社会心理学」の授業評価,受講生の自己評価,及び満足度など

	授業評価 <sup>a)</sup>			自己評価 <sup>a)</sup>			出席 <sup>b)</sup>	満足度 <sup>b)</sup>	成績 <sup>b)</sup>
	内容	教官	形態	講義内	講義外	受講			
平均値 (標準偏差)	4.45 (0.47)	4.45 (0.52)	4.38 (0.54)	4.01 (0.58)	2.81 (0.88)	4.65 (0.43)	12.94 (1.26)	4.24 (0.64)	27.05 (11.21)

<sup>a)</sup> 因子の評定値は1~5の値をとりうる(3が「どちらともいえない」に相当)。得点が高いほど評価が高いことを示す。

<sup>b)</sup> 出席は0~14,満足度は1~5,成績は0~50の値をとりうる。いずれも得点が高いほど評価が高いことを示す。

Table 4 授業評価と自己評価,授業評価内,自己評価内の因子間の関連

	授業評価			自己評価		
	内容評価	教官評価	形態評価	講義内	講義外	受講態度
授業評価						
授業の内容評価						
教官の授業態度評価	.71 <sup>**</sup>					
授業の形態評価	.37 <sup>**</sup>	.36 <sup>**</sup>				
自己評価						
講義内積極的態度	.59 <sup>**</sup>	.49 <sup>**</sup>	.24 <sup>*</sup>			
講義外積極的態度	.21 <sup>*</sup>	.26 <sup>**</sup>	.08	.51 <sup>**</sup>		
受講態度	.16	.14	.09	.35 <sup>**</sup>	.22 <sup>*</sup>	

n = 108, \* p < .05, \*\* p < .01

( $r = .61$ )の平均値を「受講態度」得点として算出した(1～5点, 得点が高いほど, 受講態度に対する自己評価が高い)。

#### 対象授業の評価, 受講生の自己評価, 満足度

対象となった「社会心理学」の学生による授業評価, 学生による自己評価, 学生の出席回数, 満足度, 成績の平均値と標準偏差をTable 3に示した。授業の内容評価, 教官評価, 形態評価はいずれも4点台中頃(得点範囲1～5点)であり, 比較的高いことがわかる。次に, 学生の自己評価では, 講義内積極的態度と受講態度は, 4点台と比較的高かったが, 講義外積極的態度は2.81と低かった。さらに, 出席は, 12.94回(全14回)と非常に高いことがわかる。満足度についても, 4.24と高かった。最後に, 期末試験の平均点は, 27.05と比較的高かった。総合的に見て, 対象となった「社会心理学」の授業評価は高く, 学生自身の自己評価も講義以外での学習態度を除けば非常に高かったといえる。

#### 授業評価と自己評価との関係, 授業評価内, 自己評価内の関係

学生による授業評価と自己評価との関連をみるために, 相関分析を行った(Table 4 左下)。その結果, 講義内積極的態度と授業の内容評価, 教官の授業態度評価との間に比較強い正の相関がみられた。また, 講義内積極的態度は授業の形態評価と弱い正の相関がみられた。さらに, 講義外積極的態度と授業の内容評価, 教官の授業態度評価との間には, 弱い正の相関がみられた。これらの結果から, 講義中においても講義以外でも積極的に学習している学生ほど授業の内容, 教官の態度を高く評価していることがわかる。

次に, 授業評価の3因子間, 自己評価の3因子間の関連性をみるために相関分析を行った(Table 4)。授業評価の3因子間の相関をみたところ(Table 4 左上), 授業の内容評価と教官の授業態度評価との間に, 強い正の相関がみられた。また, 授業の形態評価は, 授業の内容評価, 教官の授業態度評価と弱い正の相関がみられた。つまり, 教官の授業態度評価が高いほど, 内容に対する評価も高いこと, 授業の基本的な形態も内容評価, 教官の評価に影響を与えることが示された。続いて, 自己評価の3因子間の相関をみたところ(Table 4 右下), 講義内積極的態度と講義外積極的態度との間に, 比較強い正の相関がみられた。また, 受講態度と講義内積極的態度, 講義外積極的態度との間に弱い正の相関がみられた。つまり, 講義中に積極的に学習している学生ほど講義以外においても学習に対して積極的であることが示され, 受講態度の良い学生ほど, 講義中, 講義以外での学習

態度も積極的であることが示された。

#### 学生による授業評価と満足度との関係

学生による授業評価と学生自身の授業に対する満足度との関連を検討するため、相関分析を行った (Table 5)。授業評価に関する3因子と満足度との相関関係をみたところ、授業の内容評価、教官の授業態度評価と満足度との間に比較的強い正の相関がみられた。また、授業の形態評価と満足度との間に弱い正の相関がみられた。つまり、授業の内容評価と教官の授業態度評価が高いほど、満足度が高いことがわかる。

次に、授業評価と満足度との関連をより詳細に知るため、授業評価の高さにより満足度が異なるかを検討した。まず、被調査者を授業評価の各因子得点の高低により分類した。各授業評価得点の上位30%を高群、下位30%を低群とし、満足度得点に対して t 検定を行った (Table 6)。その結果、授業の内容評価に関しては、授業内容を高く評価している高群は、低く評価している低群よりも、満足度が高かった ( $t(77) = 8.40, p < .05$ )。教官の授業態度評価に関しても、教官の授業態度を高く評価している高群は、低く評価している低群よりも、満足度が高かった ( $t(60) = 6.60, p < .05$ )。さらに、授業の形態評価

Table 5 授業評価と満足度との相関係数

満足度	授業評価		
	授業の内容評価	教官の授業態度評価	授業の形態評価
満足度	.66**	.61**	.27*

$n = 108$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

Table 6 授業評価の高低による授業満足度の違い

満足度	授業の内容評価		教官の授業態度評価		授業の形態評価	
	低群	高群	低群	高群	低群	高群
	$M = 3.92$ $n = 39$	$M = 4.90$ $n = 40$	$M = 3.76$ $n = 32$	$M = 5.00$ $n = 30$	$M = 3.66$ $n = 36$	$M = 4.89$ $n = 39$
満足度	3.77	< 4.68	3.72	< 4.67	4.14	< 4.44

注) 不等号は、評定値間にその方向に有意差があることを示す ( $t$ 検定,  $p < .05$ )

に関しても、授業の形態を高く評価している高群は、低く評価している低群よりも、満足度が高かった ( $t(73) = 2.16, p < .05$ )。したがって、授業の内容、担当教官の授業態度、授業の形態を高く評価している学生は、低く評価している学生よりも満足感を感じているといえる。

学生による自己評価、出席回数と満足度、成績との関係

学生による自己評価、出席と学生自身の授業に対する満足度、試験での成績との関連を検討するため、相関分析を行った (Table 7)。自己評価に関する3因子、出席回数と満足度との相関関係をみたところ、講義内積極的態度と満足度との間に比較的強い正の相関がみられた。また、授業外積極的態度、受講態度、出席回数との間に弱い正の相関がみられた。つまり、授業中の学習に対して積極的である学生ほど満足度が高かった。また、出席回数が多い学生ほど満足度が高かったことが示唆される。自己評価、出席と成績との関連では、講義内授業態度、受講態度、出席回数と成績評価との間に、弱い正の相関がみられた。したがって、授業中に積極的に学習している学生ほど、受講態度が良い学生ほど、出

Table 7 自己評価、出席と満足度、成績との相関関係

	自己評価			出席回数
	講義内積極的態度	講義外積極的態度	受講態度	
満足度	.57 <sup>**</sup>	.25 <sup>**</sup>	.22 <sup>*</sup>	.23 <sup>*</sup>
成績	.38 <sup>**</sup>	.19	.38 <sup>**</sup>	.31 <sup>**</sup>

$n = 108, \quad * p < .05, \quad ** p < .01$

Table 8 自己評価の高低による授業満足度と成績の違い

	講義内積極的態度		講義外積極的態度		受講態度	
	低群	高群	低群	高群	低群	高群
	$M = 3.41$ $n = 32$	$M = 4.74$ $n = 39$	$M = 1.88$ $n = 38$	$M = 3.76$ $n = 36$	$M = 4.04$ $n = 28$	$M = 5.00$ $n = 41$
満足度	3.84	< 4.64	4.13	< 4.44	4.11	< 4.51
成績	22.06	< 31.41	26.89	< 29.97	19.32	< 31.05

注) 不等号は、評定値間にその方向に有意差があることを示す ( $t$ 検定,  $p < .05$ )

席回数が多いほど、成績が良いことがわかる。

次に、自己評価と満足度、成績との関連をより詳細に知るため、t検定を行った (Table 8)。まず、自己評価の高さにより満足度や成績が異なるかを検討した。被調査者を自己評価の各因子得点の高低により分類した。各授業評価得点の上位30%を高群、下位30%を低群とし、満足度得点と成績評価に対してt検定を行った。その結果、講義内積極的態度に関しては、講義中の積極的学習態度の自己評価が高い学生は、低い学生に比べて、満足度が高く、成績も良かった ( $t(69) = 6.34, p < .05, t(69) = 3.63, p < .05$ )。講義外積極的態度に関しては、講義以外での積極的学習態度の自己評価が高い学生は、低い学生に比べて、満足度が高かった ( $t(72) = 2.19, p < .05$ )。しかし、成績に差はみられなかった ( $t(72) = 2.19, n.s.$ )。さらに、受講態度の自己評価が高い学生は、低い学生よりも、満足度が高く、成績も良かった ( $t(67) = 2.71, p < .05, t(67) = 4.73, p < .05$ )。したがって、講義中、講義以外でも学習に対して積極的な態度を持つ学生は、そうでない学生に比べ満足感を感じていた。特に講義中に積極的な態度を持っていた学生は、そうでない学生に比べ成績も良かった。また、受講態度についても、授業中にしっかりとした態度で受講している学生はそうでない学生よりも満足感を感じており、成績も良かった。

続いて、出席回数により満足感や成績が異なるかを検討した。被調査者を出席回数により高低に分類した。出席回数の頻度上位30%を高群、下位30%を低群とし、満足度得点と成績得点に対してt検定を行った (Table 9)。その結果、出席率の高い学生は、低い学生よりも、満足度が高かった ( $t(76) = 3.95, p < .05$ )。また、成績に関しても、出席率の高い学生は、低い学生に比べ満足度が高かった ( $t(76) = 3.07, p < .05$ )。つまり、講

Table 9 授業への出席と満足度、成績との関連

	出席回数	
	低群	高群
	$M = 11.26$	$M = 14.00$
	$n = 31$	$n = 47$
満足度	4.00	< 4.49
成績	23.29	< 31.09

注) 不等号は、評定値間にその方向に有意差があることを示す (t検定,  $p < .05$ )

義に多く出席している学生は、あまり出席していない学生よりも、講義に対して満足しており、成績も良いことが示された。

#### 学生による担当教官の特性評価と満足度，成績との関係

学生による担当教官の特性評価と授業に対する満足度，試験での成績との関連を検討するため，相関分析を行った（Table 10）。担当教官の特性評価に関する4項目と満足度，成績評価との相関関係をみたところ，教官の熱意，教官の信頼性と満足度との間に，比較的強い正の相関がみられた。また，教官のユーモア，教官の友好的態度と満足感との間に弱い正の相関がみられた。他方，教官の特性評価と成績との間には有意な相関はみられなかった。これらの結果から，教官の特性評価が受講生である学生の満足度に促進的な影響を与えることが示唆される。

Table 10 担当教官の特性評価と満足度，成績との相関関係

	担当教官の特性評価			
	熱意	ユーモア	友好的態度	信頼性
満足度	.48 <sup>**</sup>	.32 <sup>**</sup>	.38 <sup>*</sup>	.47 <sup>*</sup>
成績	.07	.08	.08	.09

$n = 108$ , <sup>\*</sup>  $p < .05$ , <sup>\*\*</sup>  $p < .01$

#### 考 察

##### 学生による授業評価リストと自己評価リスト

因子分析の結果をもとに，学生による授業評価及び学生による自己評価を行うための授業評価項目リスト，自己評価項目リストの作成を行った。学生による授業評価の15項目から，評定値にもとづいて，最終的に3因子が抽出された。各因子は，「授業の内容評価」，「教官の授業態度評価」，「授業の形態評価」と命名された。「授業の内容評価」，「教官の授業態度評価」の各因子は，それぞれ，松田他（1999）における「授業内容のすばらしさ」因子，「教師の人柄の良さ」因子に相当するものであった。3因子間では，授業の内容評価と教官の授業態度の評価との間に強い正の相関がみられた。つまり，教官の授業態度も授業の内容評価に影響を与えることを示唆している。これらの結果は，授業評価に

関して、授業内容の評価と教官の態度評価が欠かせないものであることを示している。他方、学生による自己評価の15項目から、評定値にもとづいて、最終的に3因子が抽出された。各因子は、「講義内積極的態度」、「講義外積極的態度」、「受講態度」と命名された。「講義内積極的態度」、「受講態度」の各因子は、松田他(1999)における「学習達成感」因子、「真面目で積極的な学習態度」因子に相当するものであった。本研究では新たに「講義外積極的態度」の因子が抽出された。

#### 学生による授業の評価と自己評価

本研究で対象となった「社会心理学」の評価は、授業評価の3因子においていずれも4点台であり、非常に高いものであった。また、満足度においても、4点台であり、学生の満足度も高かったといえる。さらに、出席は成績には一切関係しなかったが、平均出席回数は12.94回(全14回)であった。以上の結果から、対象授業の総合評価は高かったといえる。次に、受講生である学生の自己評価の結果について述べる。自己評価の講義内積極的態度と受講態度については、得点が高く、学生が授業中真面目な態度で、積極的に学習していたことを示している。他方、講義外積極的態度については、あまり高くなかった。これは、対象となった授業で講義以外で調べる課題が出されなかったためと考えられる。

#### 学生による授業評価、自己評価と授業への満足度、成績との関連

学生による授業評価と自己評価との関連 学生による授業評価と自己評価との関連を検討した。その結果、講義内において、積極的な学習態度をもつ学生ほど授業の内容と教官の授業態度を高く評価していた。このことは、対象となった授業の評価の平均値が高かったことから考えると、総合的に評価の高い授業に学生が積極的に参加した結果、内容と教官の授業態度を高く評価したと考えられる。他方、“授業中、居眠りをしなかった。”、“授業中、私語をしなかった”など受講態度評価は、授業評価にはほとんど関連していなかった。

学生による授業評価、自己評価と満足度、成績との関連 まず、学生による授業評価と満足度との関連を検討した。その結果、授業評価の高い学生ほど満足度が高い傾向がみられた。つまり、授業の内容や担当教官の授業態度を高く評価した学生は、授業に対して満足感を感じていたのである。また、授業内容を高く評価した学生、教官の授業態度を高く評価した学生、授業の形態を高く評価した学生は、低く評価した学生に比べ、満足度が高

かった。このことも、授業評価の高い学生は満足度が高いことを示している。しかしながら、この結果も、対象となった授業の総合的な評価が高かったということが前提となっている。言い換えると、授業の総合的な評価が高いために、実際にその授業を真面目に受け、積極的に学習した学生が満足感を得られたといえるだろう。

次に、学生による自己評価と満足度、成績との関連をみたところ、講義中に積極的に学習した学生、講義中の受講態度が良い学生、講義以外でも学習に積極的であった学生は満足度が高かった。このことは、講義内、講義外共に積極的に授業に臨む学生は、授業に対する満足感が高ことを示している。また、積極的に授業に臨む学生、講義中の受講態度が良い学生は、そうでない学生に比べ成績も良いことが示された。つまり、受講態度が良く、授業中積極的に学習した結果、成績が良かったと解釈される。

最後に、出席回数と満足度、成績との関連を検討した結果、出席回数の多い学生は少ない学生に比べ、成績が良く満足感も高かった。対象となった授業では、「出席は点呼では取らないこと」、「出席は成績評価には一切関係しない」ことが初回のオリエンテーションで説明されていた。このような授業状況で、自ら出席した学生は、成績が良く、その結果、満足感も高かったと考えられる。

担当教官の特性と満足感、成績との関連 本研究では、担当教官の特性として熱意、ユーモア、友好的態度、信頼性を取り上げ、その特性が学生による授業評価と成績にどのような影響を与えるかを検討した。分析の結果、教官のすべての特性評価は満足度と正の相関がみられた。しかし、担当教官の特性と成績との間に関連はみられなかった。つまり、担当教官の特性は学生の成績には影響を与えないが、学生の満足感に促進的に働くことが示唆された。このことから、講義中の教官の熱意、ユーモア、友好的態度、信頼性が、学生の授業への満足にとって重要であることが示された。特に熱意と信頼性に関しては、高い関連がみられている。

#### 今後の課題

本研究の今後の課題として、以下の2点があげられる。第1に、本研究では相関分析とt検定を行ったが、自己評価、担当教官の特性、出席などの要因は相互に影響しあい、授業評価、満足度、あるいは成績に影響を与えている可能性がある。したがって、各要因の相互作用を含めた多変量解析が必要である。第2に、本研究においては、松田他(1999)やFeldman(1989)で報告された「成績の悪い学生の授業評価は低い」という点について

分析を行っていない。この点については、成績評価を学生に通知した後に、授業評価を行う必要があるため、今後の調査では試験結果のフィードバック後に授業評価を行い、検討していく必要があるだろう。

#### 引用文献

- Elmore, P.B., & Pohlmann, J.T. 1978 Effect of teacher, student, and class characteristics on the evaluation of college instructors. *Journal of Educational Psychology*, 70, 187 - 192.
- Feldman, K.A. 1989 The association between student ratings of specific instructional dimensions and student achievement. *Research in Higher Education*, 30, 583 - 645.
- Greenwood, G.E., & Ramagli, H.J.Jr. 1980 Alternative to student ratings of college teaching. *Journal of Higher Education*, 51, 673 - 684.
- 広島大学教育学部 1997 学生からみた教職科目の授業の評価と改善に関する研究 平成8年度教育学部教育研究特別経費報告書
- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察 大学の授業評価に関する実証的研究(8) 福岡教育大学紀要, 42, 277 - 291.
- 牧野幸志 2000 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 専門必修科目「人間関係論」の場合 高松大学紀要, 35, 印刷中.
- 松田文子・三宅幹子・谷村 亮・小嶋佳子 1999 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度, 及び成績の関係 教職必修科目「生徒指導論」の場合 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 121 - 130.
- 三宅幹子 1999 大学生における授業選択態度のタイプと授業評価, 自己評価, 及び成績の関係 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 141 - 148.
- 大槻 博 1993 多摩大学の学生による授業評価「ボイス」をめぐる考察 一般教育学会誌, 15, 47 - 49.
- 安岡高志・高野二郎・成嶋 弘・光澤舜明 1986 学生による講義評価 一般教育学会誌, 8, 46 - 59.
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989a 学生による講義評価 学生の質と講義評価の関係について 一般教育学会誌, 11, 56 - 59.
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989b 学生による講義評価 成績と講義評価の関係 一般教育学会誌, 11, 99 - 102.

高松大学紀要

第 35 号

平成13年 2月23日 印刷

平成13年 2月28日 発行

編集発行

高 松 大 学  
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064